安芸・香美境
畑山の稜線
安芸平野から北を眺めるとラクダのこぶのような山容の"秀峰"五位ヶ森。
安芸市畑山と香美市物部の境となるこの稜線を歩くと南に青い太平洋。
北面は優雅でやさしいブナ林がつつんでいる。
そして地図から消えていった集落の跡には人々の営みの痕跡が色濃く漂っている。
中津尾の歴史は古く源平合戦で平重盛の弟 平教盛が落ち延びてきた伝説も残る。
長宗我部地検帳には「中ツヲ村」と記され
1952年には14世帯72人が暮らしていたという。
1960～66年には営林署の事業所があり人口は123人まで増え、分校も開かれていた。
しかし、戦後外材輸入や石油へのエネルギー転換により、山村の仕事は激減し急激に人口が流出した。
2016年に住む人がいなくなり「消滅」した。
檜ノ谷山には木地師が住んでいてケヤキで木製品を作っていた。木地師作の盆をもらった人もいる。
檜ノ谷事業所はモミ・ツガ・ケヤキなどの天然林を生産していた。
なかでもケヤキ大径木がすごかった!!
香美市側一帯 国有林
檜谷山
H16年まで安芸営林署の管轄だった。(H10.4.1〜)
S33より檜ノ谷事業所で木材生産をしていた。
リョウブ
シャクナゲ
おだやかな尾根
スギ林
中ピーク
若いヒメシャラ林
安芸の秀峰
五位ヶ森
1185m
南国方面
香長平野
みえる
明神
ずっと
倒木が
道をふさぐ
鹿の巣
堂平
中津尾
畑山林道
こちら側へは
うかつに入ると
遭難の危険。
険悪、複雑。
柿ヶ久保
柿ヶ久保は平家小松伝四郎を祖として開かれた。
S35頃には8戸30人ほどの人々がくらしていた。
S45頃最後の一軒が山をおりて消滅する。
小松一族の氏神を祀る神社には
10月第1と1月第2の日曜日に縁者が集まり神事を執り行なっている。
家の跡
柿ヶ久保
なつかしの
ワイヤークレーン
花ノ久保橋
柿ヶ久保から畑山の学校まで片道1時間あまり。
山道をかけおりて、つり橋をわたって通っていた。
帰りには集落入口でおばちゃんがお弁当を持ってまってくれていた。
郵便さんに手紙をたのまれることもあった。
大きい子が小さい子をつれて学校へ通っていた。
岩井谷川
(祝い谷)
2017.10.1(日) 柿ヶ久保神社で小松さん、小原さん5名の出身者の方々にぐうぜんお会いして、貴重なお話しをお聞きし、ここに記す。
旧
発電所
大野の「みやの森」 手前に写しの神様として「いちはは様」を祀っている。お参りしたら乳が出るという。
畑山川にかかっていた吊り橋はほとんど通れない
大野川
大野橋
昭和橋
小川名
畑山川
混住開地で道が途だえる。
作業道をたどり切り通しから上ると尾根に出ることができる。
明神
人工林の中にここだけが鎮守の森に守られている。
天狗が住むという伝説。
ツルシキミ
北側
南側
平坦な天然林の森
シロダモが多い
小屋跡か?
一升ビン散乱
ブナ林
高知平野見える
宇筒舞山
石摺木山
1294m
民有林
リョウブはシカにことごとく皮を食べられている。
ブナ、ヒメシャラ林
谷が深い
草原
三嶺〜天狗塚
みえる
三嶺〜天狗塚への稜線
みごとなブナ林
隠れた名峰
杉ノ谷山
1367m
太平洋〜
安芸平野みえる
この一帯
国有林
安芸川と伊尾木川の分水嶺。
大字 畑山と古井の境。
合併前の畑山村と東川村との村境。
作業道
展望広場
横荒〜別役の山々が一望。
作業道と接する鞍部
大きなブナの木
深い深い
山また山の
世界。
1300mクラスの
山々がとり囲む。
物部川水系と
安芸川水系の分水嶺
作業道を歩くこともできる。
西吉森〜檀森山〜安芸平野〜ぐるっと太平洋までよく見える。
(楽なようで林道を歩くのはこたえる。)
宇佐神社
石垣の住居跡
中ノ川
中ノ川橋
張川
中ノ川にも営林署の事業所があった
弘川林道
伊尾木川
栗木橋へ
宝蔵岸
張川林道の
カモシカ
仙谷林道
仙谷山
1040m
旧
別役往還
日本一 名前の長い山
丸場宝加勝下宝加勝山
柚子畑の中に
学校の建物
正藤
中ノ川から正藤の学校まで
山をこえて1時間
石垣
人工林や柚子畑となっている石垣が積まれた畑跡がいたる所にある。
何百年もの間、そこに住む人々が営々と石を積み、土を耕し汗を流していた暮らしを想像する。
その暮らしは想像以上に過酷だったことだろう。
びくともしない石垣。
山間で生きてきた人々の営みはとてつもなく尊い。
超ド級
「土佐の名木百選」にも収録されていない隠れた名木。
宇佐神社
安芸平野からほぼ真北によく見える。
限界集落のまわりには、すでに消滅して地図から名前の消えた集落がある。
仕事や利便性を求めて人は川下へ、街へと流れ出て行き、都市が栄えている。
都市のまわりにある限界集落が消滅してしまう時
都市もまた限界集落化していくことだろう。
大小の差はあるが周辺の集落こそ最も大切な地域の「宝」だと思う。
このわずかな範囲の中だけでも
中ノ川、正藤、柿ヶ久保、中津尾、大野の集落から住民がいなくなり消滅している。
これらの集落は中世から近代にかけて木材や炭などの資源の生産地として栄えてきた。(堂平も住民はいない)
しかしここ数十年で日本の文化や歴史の大転換期となり、何百年と続く集落の営みがなくなり、人口ゼロとなり集落が消滅している。